

講演会「断熱が日本を救う」講師：高橋 真樹さん（ノンフィクションライター）

2025年1月25日 14:00～16:30 奈良公園バスターミナルレクチャーホール 47名が参加されました

■講演内容 日本は「我慢の省エネ」の国。欧米では「我慢の省エネ」は省エネとは言わない。日本の建物の「断熱・機密性能」は悲しいほど低い。既存住宅の9割はほぼ「無断熱」であり、断熱されていると言われる13%の建物でも、断熱等級4にすぎません。日本は基準が低く、義務化もされていません。日本のZEHでも等級5。等級が6や7になると温度ムラがなくなり足元が暖かい。「断熱」は冬だけのものというのは大きな誤解。断熱と健康は大いに関係があり、日本では交通事故死の2倍の方が浴槽内の溺死。ヒートショックは浴室と脱衣所での血圧の上下で起こす。冬の寒さで亡くなる人の割合が高いのは、栃木県、茨城県、愛知県。寒い北海道や東北ではない。北海道よりも奈良の方が亡くなる人の割合が高いのです。

WHOでは全室18℃以上が基準。家が暖かいと認知症予防になり、夏の熱中症も室内で起こす人は4割にも上るので、断熱は効果的に室内の高温を抑制できる。エネルギーの出入り口は窓。アルミサッシの家が多いが、アルミは熱を伝えやすいため、寒さ、暑さを室内に伝えてしまう。また結露により、カビやダニが発生し、アレルギーなど体の不調を招く。住宅の断熱により、様々な病気を予防し改善できる。アルミサッシが主流である先進国は日本だけ。「アルミ・ペアガラス」ではなく「樹脂サッシ・ペアガラス」が性能が良い。欧州では、すでに断熱建物だが、いまや「トリプルガラス」への改修工事に移行しています。

断熱は、省エネができ、健康や経済の切り札となる。欧米では、暑さ・寒さ・結露・カビ発生する住居に住むことは「人権問題」。「断熱」したら社会が変わると言っても過言ではありません。中古住宅に内窓を付けたら、次は天井、そして床。マンションの断熱リフォームは「未来への投資」。国・地方公共団体の補助金を活用すると経費が抑えられます。「断熱」は実施すれば、確実に効果があり、建物の耐久年数が永くなり、建物の価値が上がります。

2023年～25年度で住宅向けに「先進的窓リノベ」として国の補助金が予算化されています。ただし、2025年で終了するとのこと。もっと進めていかねばならない事業です。政府のガソリン・電気・ガスへの補助金は消えてなくなるお金であり、未来への投資ではありません。社会課題の解決策として、高性能木造賃貸アパートにして等級6にしたら、賃貸料は少し高いが快適なために入居率が高くなったという事例もあります。金融機関はリノベーションにお金を貸すように発想を転換すべきです。老朽マンションで断熱改修すれば躯体の長寿命化にもつながり、コンクリートを断熱材で覆うと住まいが快適になり建物も長寿命化します。埼玉県などでの学校や公共施設の断熱改修プロジェクトや鳥取県の新築高性能住宅（とっとり健康省エネ住宅（NE-ST））普及策を実施しています。今や、日本は国家レベルの危機。光熱費の高騰・エネルギー危機は日本の

エネルギー自給率の低さからくるもの。外国から購入しているエネルギーコストは年間33兆円にも上ります。そして気候危機はとても深刻ですが日本では危機意識が低い。今後はもっと熱くなります。「緩和」と「適応」策として、断熱は両方の対策になります。今の消費電力量を再エネで全部賄うという事ではなく、断熱で消費電力を大幅に減らせれば再エネでもまかなえることになります。切り札は「断熱」です。「我慢の省エネ」は人権問題であり、「寒く暑い家に住むのは当たり前」という意識を、行政も市民も転換しましょう。まずは職場でも自宅でも、小さなことでもできることから（窓から）断熱しましょう。



会 員 募 集 ！

サークルおてんとさん 年会費 正会員 3,000円
準会員 1,000円

お問合せ e-mail: otentosan0213@yahoo.co.jp

再生可能エネルギーの普及を進めます
特定非営利活動法人

サークルおてんとさん

理事長 清水順子

<https://www.otentosan.net/wp/>

